

閉会挨拶 荻上実行委員長

あっという間に二日間が過ぎてしまったように思います。

今年は、去年までと違って、セッションをパネルディスカッションという形式で行おうということで企画しましたが、私としては、非常に中身の濃い議論ができてよかったと思っておりますが、皆さん如何でしょうか。(拍手)ありがとうございます。

パネラーの皆さんは非常に大変だったと思いますが、私、聞かせていただいて、本当に良かったと思っております。これをこれからの皆さんの研究に何らかの形で生かして頂いて、古代史学の研究が大きく進展することを期待しております。

今回、数学が悪者にされたかのような印象を持っておりますが、何か私が申し上げたこととかなり違うような受け取り方をされたようで、古代史学に公理などというものがあるとは全く思っておりません。もしあるとすれば、古代においても人間が活動していたということくらいが公理ではないかと思えます。公理とは、関係する全員がいささかの疑いもなく、理解に苦しむこともなくすんなりと受け入れられるようなものでなければなりません。複雑な内容のものは数学では公理とは言いません。

私が言いたかったのは、古代史学を数学のような学問体系にして欲しいなどということでは全くありません。そんなことをされたら困るのは数学屋です。数学は他の分野で真似のできないことをやっているのが存在意義だと思っておりますから、古代史学に真似をされてたまるかと思っております。

私が皆さんに期待したいのは、客観的で厳密な議論を駆使してほしいという、それだけです。真に僭越ながら、私が見るところ、あるいは皆さんがお書きになった物などを読ませていただくと随所に論理の飛躍や甘さが目につきます。数学屋というのは100%厳密な論理を展開することが習性となっているので、どんな分野の事であっても論理に飛躍があるということは分かります。論理に飛躍があれば誰でも指摘できますから、まさに敵に塩を送るようなものです。数学は100%客観的で厳密な論理を使いますが、数学以外の分野に100%は無理だと思うし、そんなことを要求したら学問が成り立たなくなります。しかしそうはいつでも、せめて90%くらいは厳密にやってくださいというのが私の願いです。「目指せ90%！」

今日のディスカッションをお聞きしていても、この部屋の中でも随分意見が分かれるわけです。この部屋の中で意見が分かれるものを外へ持ち出したらどうということになるかは、火を見るよりも明らかなわけで、せめて、皆さんの仲間を説得できるぐらいの説得力を持って研究を進めていただきたいと思っております。簡単でないことは百も承知しております。しかし、「こんなことは当たり前じゃないか」とか、あるいは「まともな人間だったらこんなことは分からないはずがない」などといっても、それでは証明にはなりません。疑問を持たれたらそれにきちんと答えられることが大事です。「自明である」とか、「分からない方がおかしい」というのは全く証明にならないということを肝に銘じていただきたいと思っております。疑問を持たれた場合には、必ずそれにきちんと答えることが必要です。「丁寧に説明する」ということが好きな人がいるようですが、それは大事なことだと思います。

ということで、今後の発展を期待したいと思っておりますが、いつも、この終わりに来年はどうしま

しょうかということをお聞きしていますが、「来年はこんなことをやりたいね」といった何かございますか。昨日、今日の議論をお聞きになって、「こういうことをもっと深堀してやりませんか」というようなご提案があれば、伺って、実行委員会で検討したいと思います。

■井上さん(発言)

思いつきですから。今日の議論の中で万葉集とかそういうものがちょっと対象外だといった発言を耳にしました。今までの歴史・文献なり考古学の他に万葉集であるとか、謡曲であるとか、そういった伝承的な文というのは何らかの形で時代背景を表している物が多いように思うので、その辺のところも多少取り上げてもらうと良いのではないかと思ったりしました。ここにいらしている新庄さんが新庄千恵子さんのご子息であるということは確かでしょうか。よく知らないんですけど。新庄さんの謡曲ということを昔多元の会で聞いたことがありまして、やっぱり筋の通った話をなさるなと感じましたのでそういった思考でお話させていただきました。

他には如何でしょうか。

今回、特にパネルディスカッションの中で随分盛り上がったテーマがあったと思いますが、今、万葉集や何かを取り上げる場合、そのものを取り上げるのか、そのものを題材にして何を議論するのか等、色々あろうかと思いますが、いかがでしょうか。

■大墨さん(発言)

「今回、若井先生をお招きして日本書紀から見たヤマト王権の発展という立場から367年までは九州に王権があって日本書紀の記述によれば、それによって九州は制圧されたというような立場からお話しただいて、その後結局討論の中でも、日本書紀史料批判の津田批判にかかわる部分についてはもう、ほとんど共感する、まったくずれが無いような認識を教えていただいたのですけれども、その後の中国史所を資料的にどう評価するかによってこの会場の皆さんとの認識のずれなんかがやっぱりあるんだなということを確認しました。この領域については谷川先生の7世紀の2つの政治外交実態の存在というお話もありましたし、今後、この領域でもう少し突っ込んで一般の先生なんかもお招きして議論できたらいいのかなと、今日は思いました。

ありがとうございます。

今回、非常に大きなテーマ「倭国から日本国へ」を取り上げましたので、これに関連してまだまだ探求すべき、あるいは議論すべき事柄がいっぱいあると思います。何か他にご意見があれば伺っておいて、実行委員会で検討したいと思います。

いまここですぐに伺うのも時間の関係もありますので、どうぞご自由に実行委員の方へ色々な形でご意見をお寄せいただければありがたいと思います。

暗くなってしまいましたので、これでお開きにしたいと思います。

どうも2日間ありがとうございました。

いつも日程を仮押さえていますので、今回もそうさせていただきます。

来年も11月第2週の週末ということでよろしいでしょうか。(拍手)ありがとうございます。